あふれだす

栗山政子

道草の果ては夕べの枯野原
凍雲やボレロが胸に鳴りどほし
水よりも空へ近づく浮寝鳥
岩を跳ぶ人の匂ひや滝涸るる
冬の噴水一本の身を揺らし
金縷梅や日向どんどん拡がり来
声の去り足音の去り蕗の薹
藪椿海の光のみつしりと
瞬きをすれば逃水あふれだす
落椿ひとつは号泣のかたち